

令和5年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

技術支援課
(普及指導室)

生育の概況	高温のため生育は急速に前進している。茎立期は平年より6日程度早まっており、出穂期も同様に早まる見込み。現在の作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	除草剤散布、赤かび病防除・追肥準備

1 気象経過 (前橋橋地方気象台データの平年差・比、※3月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	※3月
平均気温	+2.0℃	±0.0℃	+0.6℃	+1.2℃	+4.1℃
降水量	122%	55%	15%	45%	77%
日照時間	106%	99%	102%	96%	121%

2 生育概況

(1) 概要

播種作業は概ね順調であったが、11月5半旬の降雨のため播種が遅れたほ場が散見され、一部で12月まで行われた。適期に播種されたほ場の出芽は良好だが、播種が遅れたほ場では12月中旬以降の低温・乾燥のため出芽までに多くの期間を要し、一部で出芽不良が見られた。

12月中旬～下旬および1月下旬の低温と乾燥により生育の停滞が見られた。2月以降は平年より気温が高く、特に3月は記録的な高温(3月20日まで平年比+4.1℃)により麦類の生育は急速に前進し、小麦の茎立期は平年より4～6日早まったため出穂期も大幅に早まると予想される。生育は順調であるが、既に最高分げつ期を迎えている地点があるため、3月20日時点の茎数は平年よりやや少ない。

3月16日発表の向こう1か月の長期予報は、平年より高い確率が80%とかなりの高温が予想されているものの、低温遭遇時には凍霜害の発生が懸念される。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

雑草の発生が見られる(コアカザ、ミチヤナギ、スズメノテッポウ、ヤグルマギク、ヤエムグラ)。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほ(さとのそら)のデータの平均は、播種期は11月21日(過去平均比+1日)、3月20日現在の草丈が23cm(同100%)、茎数が1014本/m²(同87)、幼穂長が4.8mm(同150%)となっている。

農業技術センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月16日播種)では、3月20日現在、草丈が30cm(過去10カ年平均比121%)、茎数が861本/m²(同90%)であり、幼穂形成期は3月4日(同±0日)、節間伸長始期は3月16日(同-6日)、今後の気温が平年並で推移した場合の出穂期は4月20日(同-2日)、平年より1℃高い場合は4月17日(同-5日)と予想される。

(4) 作柄のまとめ

県全体の小麦の作柄は、「並」が見込まれる。

表1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地 区	播種期	2月20日		3月20日		
		草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²	幼穂長 mm
平 均	11月21日(+1日)	10.6(103)	781(92)	23.4(100)	1014(87)	4.8(150)
前橋市	11月26日(+6日)	8.8(99)	692(81)	21.3(102)	1328(93)	1.9(71)
伊勢崎市	11月26日(+8日)	9.2(96)	676(78)	24.6(111)	708(74)	6.5(217)
高崎市	11月16日(+1日)	13.0(109)	975(81)	27.6(99)	790(73)	9.9(192)
太田市	11月26日(-3日)	10.0(101)	676(140)	21.3(100)	924(96)	2.7(152)
千代田町	11月19日(0日)	11.9(128)	891(61)	33.1(130)	1072(66)	5.3(230)

*各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

*日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は過去10年、伊勢崎市は同1年、高崎市は同2年、太田市は同10年、千代田町は同1年の値。伊勢崎市、千代田町は県平均から除外した。

表2 生育基本調査結果（農業技術センター、さとのそら）

播種期 月/日	幼穂形 成始期 月/日	節間伸 長始期 月/日	2月10日		3月1日		3月20日	
			草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²
11/16 (+1)	3/4 (±0)	3/16 (-6)	8.4 (101)	553 (118)	12.5 (107)	999 (123)	29.8 (121)	861 (90)

* () 内は平年値は過去10年の平均に対する日数および比率(%)。

表3 普及指導課・地区農業指導センター管内の麦類の作柄概況

地 区	県平均	中 部	伊勢崎	西 部	東 部	館 林
作柄概況	並	並	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 排水対策

排水対策を未実施のほ場では早急に排水溝等を設置する。実施ほ場においては排水溝の確認や手直し等を随時実施し、ほ場の過湿を回避する。

(2) 追肥（実肥）

パン用小麦品種「ゆめかおり」は、赤かび病の防除との同時作業による尿素溶液2～4%での葉面散布や開花期頃に窒素成分で2～4kgの追肥を実施し、タンパク質含量の向上を図る。

(3) 病害虫対策

赤かび病の感染を防ぐため、赤かび病防除は必ず実施する。本年は生育が平年より大幅に早まっているため、生育状況に応じた防除計画をあらかじめ検討しておく。各麦種の防除適期は、小麦が開花始期～開花期（出穂7～10日後）、二条大麦が蒴殻抽出期（穂揃期10日後）、六条大麦が開花始期～開花期である。

防除後の気温が高く、降雨が多い場合は7～10日後に追加防除を行う。

うどんこ病やアブラムシは、発生状況に応じて防除を行う。「つるぴかり」「きぬの波」はうどんこ病に弱く、過繁茂のほ場で発生しやすい点に留意する。

(4) 雑草対策

収穫物への種子混入が問題となるカラスノエンドウ等は確実に処理する。

カラスムギやネズミムギ等の難防除雑草は、周辺ほ場への拡散や翌年の多発につながるため、発生量が少ないうちに抜き取りを行う。

ほ場をよく観察し、殺草限界前までに適切に処理するとともに、除草剤の使用晩

限を超えないよう注意する。

(5) 凍霜害対策

3月下旬～出穂期までの低温危険期の天候に留意する。小麦は幼穂長3mmのときに -2°C 以下、20mmのときに 0°C 以下の低温で幼穂凍死が発生する。幼穂凍死は低温日から4～5日後の幼穂の変色や新葉が抽出したときの黄化症状などにより確認できる。また、幼穂が凍死すると遅れ穂が発生するため、収穫時期に留意するとともに、調製は丁寧に行い、未熟粒の混入を防止する。

不稔粒は、出穂8～10日前の -1°C 以下の低温遭遇や、出穂前後の降霜などにより発生する。不稔粒は赤かび病の発生を助長するため、適正に防除を行う。

【参考資料】

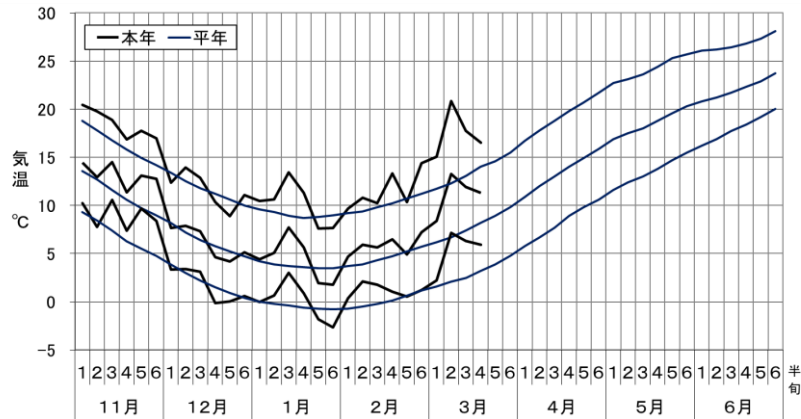


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

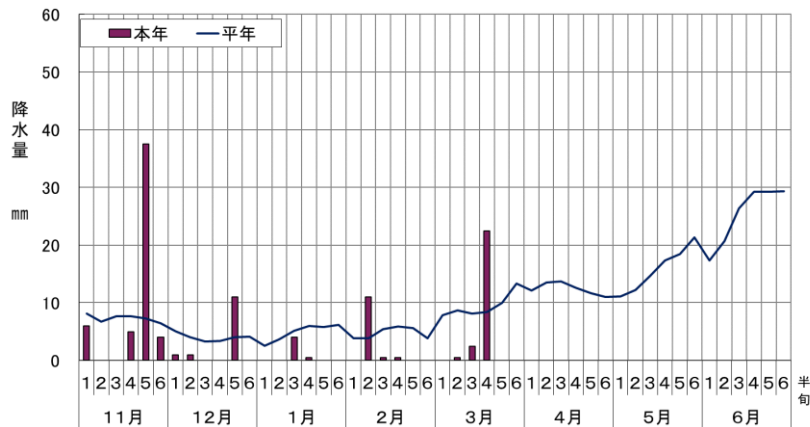


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

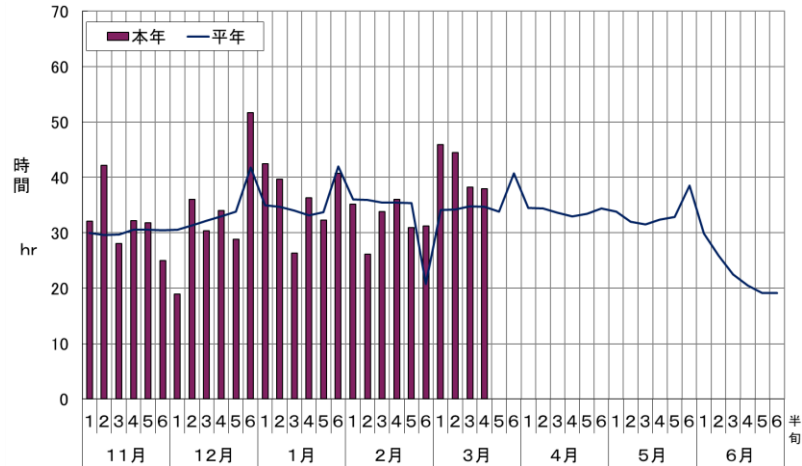


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）